

老子遠祖傳説にみる白馬朱鬣について

——初唐王權との關わりから

松 浦 史 子

緒言

唐王朝を創建した李氏が、同姓の老子の子孫を自稱した「老子遠祖傳説」⁽¹⁾はよく知られている。この傳説をめぐる先行研究では、鮮卑の血を引く唐李王朝が在來の門閥貴族や外來の佛教勢力等に對し、その受命を正當化・神祕化せんとする政治・宗教的姿勢を中心に議論がなされてきたが、唐室の祖である老子の乗り物が傳前漢・劉向撰『列仙傳』以來著名な青牛ではなく、「白馬朱鬣」というあかい鬣の白馬に描かれた謎については顧みられ

ることはなかった。他方、唐の玄宗敕撰『大唐六典』尙書禮部の祥瑞總覽には、白馬赤髦や白馬朱駿といった「白馬朱鬣」と同類のあかい鬣の白馬が最高ランクの祥瑞として收録されるものの、⁽²⁾その實態についても謎が多い。よつて本論では、老子遠祖傳説にみる老子の乗馬が白馬朱鬣とされた文脈とそこに意圖されたものについて、初唐王權との關わりから考えてみたい。

まず、白馬朱鬣に乗る白衣老子が唐室受命を豫言する老子遠祖傳説を中心に、識緯的な唐創業説話に多い白の表象をめぐる議論を整理し、本論の立ち位置を示す（第

一章）。續けて、緯書の白馬朱鬣の成立・受容と『山海經』の神話馬吉量（良）の關わりを検討した上で（第二章）、唐代には白馬朱鬣と同義とされた『山海經』の神話馬吉良が太宗の道教・儒教政策を壽ぐ瑞馬と認識されたこと、それが老子遠祖傳説に於いて唐室の祖たる老子の乘馬として示された背景をめぐり唐太宗の非常手段的な受命を道教・讖緯を用いて正當化せんとする動きがあったこと、初唐には重要な皇帝馬となつた吉良が、道教と結んだ太宗の受命や唐室の永續を祈念する瑞馬とも見なされたことを明らかにする（第三章）。最後に、唐室と老子及び白馬朱鬣の吉良を繋ぐ隴西という地を中心に、白馬朱鬣が太宗を壽ぐ瑞馬とされたもう一つの要因として、さらに初唐の關隴騎馬軍團との係わりを推測し（第四章）、中唐以降には、そうした白馬朱鬣の「受命の瑞馬」としての性格が薄れた背景を示す（結語）。

一 老子の乘馬「白馬朱鬣」をめぐる問題點 ——『高祖實錄』の佚文と白の表象

唐李氏が老子の子孫を名乗り始めた嚆矢は、唐の高祖武德九年二月成立の「大唐宗聖觀記」にみえる「啓族承家、鼻於柱史」とされる。⁽⁴⁾ それにやや先驅けた隋末から初唐にかけて、唐室の祖を名乗る老子（白衣老人）が、李淵親子の天下平定を助け受命を豫言する、という老子遠祖傳説の原型が現れ始めた。その傳説は、概ね、①霍太山②羊角山での話に大別できる。①は②に先行し、早い例に隋末の溫大雅撰『大唐創業起居注』（以下『創業注』）の記述がある。隋王朝の末期、太原に舉兵したものの長雨に難澁していた李淵（のちの唐の高祖）が、霍山神の使者である「白衣野老」の導きで難局を逃れて長安入りを果たし、その返禮として神祠建立の指示があったとの話だが、この白衣の老人は、晩唐に至ると例えば杜光庭『歴代崇道記』では、唐室の祖たる老子の使者に變化している。⁽⁶⁾

霍太山の逸話にやや遅れる②の羊角山で老子に遭遇するのは吉善行なる人物であり、白馬朱鬣はここに「老君（白衣老父）」の乗馬として描かれている。唐帝の祖を自稱する白馬朱鬣に乗った老子が、吉善行に向け天下平定の豫言を唐帝に伝えるように指示し、その實現後、高祖が吉善行に封賞を與え老子廟を立てたという識緯的な話で、その嚆矢は、唐の玄宗御製「慶唐觀紀聖銘」とされることが多い⁽⁸⁾。しかしこれより早い唐高祖の武德三年の羊角山の老子出現例として本論で注目するのが、宋の趙明誠撰『金石錄』卷二六の「唐龍角山紀聖銘」に引用される『高祖實錄』の次の佚文である。

右の『唐龍角山紀聖銘』は、明皇の撰。按ずるに『高祖實錄』に：「武德三年四月の辛巳、晉州の人吉善行、(a)羊角山に於いて、白衣老父の白馬朱鬣の乗るに見ゆ。善行に謂いて曰く：『吾が爲に唐天子に語れ、吾は老君爲り、汝の祖なり。今年平賊の後、汝當に帝と爲り、天下太平なるべし。必ず百年の享國を得、(b)子孫且に千歳ならんとす。』太宗は使

老子遠祖傳説にみる白馬朱鬣について

者杜昂を遣わし祭を致せしむ。須臾にして、神復び見れ、昂に謂いて曰く：『歸りて天子に語れ、我食せず、何ぞ祭爲すを煩わんや。』高祖之を異として、其の地に廟を立て、善行に朝散大夫を授く⁽⁹⁾。

看過できないのは、斷片的ながらも趙氏による引用文のうちに、唐室の祖を名乗り、李淵親子の天下平定を豫言する「白衣老父（老君）」とともに、その乗馬としての「白馬朱鬣」がみえる點である(a)。試みに①のもつとも早い典據である『創業注』をみると、白馬朱鬣はみえず、山神の使者「白衣野老」のみが記される(注5)。とすれば、唐室の遠祖「白衣老父（老君）」の乗馬としての「白馬朱鬣」の最も早い用例は『高祖實錄』のものといえる。しかし、ここで問題となるのが白の表象である。唐室は土徳で「黃」を王朝色とするにも拘わらず、唐室の受命を豫言する老君が「白衣」をまとい「白馬」に乗るのはなぜか。その検討には、唐創業説話に顯著な白をめぐる研究を概観する必要がある。議論の中心となるのは『創業注』であり、老子遠祖傳説の「霍太山に現

れた白衣野老」ほか、隋の大業十三年六月己卯の條に見える「白旗」「白旗（衣）天子」にまつわる次の記述が注目されてきた。

一つ目が、甲子の日の旗揚げに際し、符讖で白を尊ぶため周武王に倣い白旗を用いるよう提案があったが、李淵は従わず隋色の赤旗を用いた結果、赤白混じった花園のようだったとの話^(①)。二つ目は、それに續く、東海に現れる白旗（白衣）天子をめぐる讖緯的な話である^(②)。この二つの話に見る白の意味は様々な角度から検討されてきたが、もっとも多く言及されるのが佛教・道教との関わりである。まず、戦後間もなく^(②)の「白衣天子」について、讖緯色強い佛教の一派・彌勒教の重視した白の服色との関連性を説いたのが唐長孺（一九四八）である^(②)。これに對し八十年代のはじめ、氣賀澤保規（一九八二）が、『創業注』に多い唐室の白の符命・祥瑞（①含む^(③)）及び霍太山の白衣野老について茅山派遣教との関連性を説く宮川論文（一九五〇・注二）を踏まえつつ、羊角山の白馬朱鬣に乗る老子傳説等の記述にも着目し、

それらを道教の尙白思想から捉えなおした^(④)。今世紀に入ると、姜望來（二〇一一）が右の道教説に反論するかたちで、②の東海の白衣天子の逸話について唐長孺の彌勒教説（一九四八）を基盤に、唐室は山東李氏に出るとする陳寅恪の論考（一九四三^(⑤)）をも踏まえながら、唐創業と東方文化との関わりを強調し始めた^(⑥)。

このように近年の中國では道教説への反論も見えるものの、總じて見ればこうした唐創業時の讖緯的な話は、宮川・氣賀澤保規論はじめ道教の影響を説く研究が目立つ^(⑦)。しかし唐室と讖緯・道教の関わりについて、先述の『高祖實錄』の老子傳説佚文に着目するのは、宮川説（一九五〇）に修正を加えた吉川忠夫（一九九〇）のみであり、その吉川論文にも、神話世界や白馬朱鬣への言及はない。そこで本論では、唐創業時の讖緯・道教との関わりを視野に入れつつ、初唐政權における神話世界——とくに『山海經』の政治利用という視座を新たに設け、老子遠祖傳説の「老子」の乗馬が「白馬朱鬣」とされた文脈と、そこにイメージされたものについて考えてみたい。

二 緯書の「白馬朱鬣」と『山海經』の

「吉量」

——周文王の瑞馬「白馬朱鬣」の誕生と西方犬戎の神仙馬「吉良」

白馬朱鬣の最古の文字・圖像は後漢の武氏祠祥瑞畫像石に見え、その瑞馬圖の傍らに刻まれた題記の原典は緯書とされる⁽¹⁹⁾【圖1】。經書の神祕的解釋である緯書は、未來豫言の識と結び識緯（圖識）と稱され兩漢交代期に現れた。王權の正當性を保證する祥瑞も多く記載されるが、革命に繋がる危険性等から完全な形では残されず、現在は各種文獻・出土文物等に佚文のみが伝えられている。

こうした瑞馬・白馬朱鬣の誕生と展開を採った舊稿では、漢代緯書（禮緯）の佚文では白馬朱鬣が「周文王の瑞馬」とされる特徴に着目し、その淵源が、先秦の周文王姜里幽閉説話に示される西方犬戎馬「朱鬣の鷄斯の乘」にあること、それが兩漢交替期に王權に關わった儒

者・神仙方士の手を経て、『山海經』の西方犬戎馬「朱鬣の白馬・吉量」および經書關連の皇帝馬「白馬黑鬣」と融合し、緯書の「周文王の瑞馬・白馬朱鬣」となった可能性を指摘した。⁽²¹⁾さらに魏晉には、漢代の皇帝儀禮では白馬黑鬣であった皇帝馬が白馬朱鬣に變化する⁽²²⁾。その背景として右の舊稿では、禮緯の「周文王の瑞馬・白馬朱鬣」のイメージが重ねられるためであり、それは儒家的禮制の再構築の試みられた當時、「皇位を壽ぐ禮緯の車馬の瑞」が多く國家文書に用いられたことと一連の現象であると指摘した。⁽²³⁾

このような「皇帝の瑞馬」としての要素に加え、魏晉の白馬朱鬣についてもう一つ注目しておきたいのは、先秦の神話的地理志『山海經』に初見の神仙馬「吉量（吉良）」の存在と、それを新たに殷周革命に繋がる「周文王の白き朱鬣の瑞馬」と結び附けた東晉の郭璞注である。犬封國は犬戎國と曰ふ。狀は犬の如し。（郭璞注(a)、

黃帝の後、下明白犬二頭を生む。自ら相牝牡し、遂に此の國を爲る。狗國を言ふなり）。……文馬有り。

縞身^{かうしん} (b)、色は白く縞の如し⁽²³⁾ 朱鬣^{しゅれつ}、目は黄金の若

し。名けて吉量と曰ふ (一に良に作る)。之に乗れば

壽千歳なり (c)、『周書』に曰く、犬戎は文馬、赤鬣白

身、目は黄金の若し。名けて吉黄の乗と曰ふと。成王

の時之を獻す。(d)『六韜』に曰く、文身朱鬣、眼は黄

金の若く、項は雞尾の若し。名けて雞斯の乗と曰ふと。

『大傳』に曰く、駁身朱鬣、雞目なりと。(e)『山海經』

にも亦吉黄の乗、壽千歳なる者有り。惟れ名同じから

ざる有り、小錯有るも、其の實は一物のみ。今博く之

を挙げ、以て異聞を廣むるなり⁽²⁴⁾。

海内北經の西王母仙境に續いて描かれる犬封(戎)國

には、「乗者に千年長壽をもたらす」という白き神仙

馬・吉良が生まれるという。見逃せないのは、郭璞注(a)

では吉良を「雌雄の白犬の子孫」とし、その一對の白犬

を「黃帝の血を引くもの」と解し、さらに吉良の「縞^{かう}

身」を「色は白く練り絹のよう」と説明した上で(b)、吉

良を「白身」とする『逸周書』を引くように(c)、郭璞が

吉良の「白身」を強調する點である⁽²⁵⁾。

他方、吉良の「朱鬣」について郭璞が引くのは、『逸

周書』ほか『六韜』『尚書大傳』にみえる著名な周文王

姜里説話の朱鬣の瑞馬「鶏斯の乗」である(c)(d)。姜里幽

閉説話とは、殷紂王に幽閉された周文王が、賢良の臣下

の機知により幽閉を解かれ紂王を伐つ、という殷周革命

に繋がる重要な話である。郭璞は『山海經圖讚』でも吉

良を「周文王の窮地を救った瑞馬」と讃えている點から、

彼にとつての吉良は「周文王の瑞馬」でもあったといっ

てよい⁽²⁶⁾。しかし、郭璞注の最後(e)では『山海經』の佚文

「壽千歳となる吉黄の乗」を引き、名稱は違つても「吉

良」と同一馬であることから、郭璞の解釋した

『山海經』の西方犬戎國の吉良は、殷周革命の際、周文

王の窮地を救った瑞馬であるとともに、「乗者に千歳長

壽をもたらす神仙馬」でもあったと考えられる。とくに

『山海經』最大の仙境描寫がなされる西北の條には神仙

的な黃帝の描寫が多く、この點、その西方の白き仙境⁽²⁷⁾

白犬を祖とする犬戎の神仙的白馬「吉良」を、郭璞が

「黃帝の子孫」と解することとも無關係ではないだろう

(a)。

後に述べるように、土徳の黄帝を奉じる唐王朝が、「朱鬣の白馬・吉良」という『山海經』西方犬戎の神仙馬を重要な瑞馬と見なした背景として、それを周文王の瑞馬や黄帝と結び附けた郭璞の解釋があることを、ここですでに確認しておきたい。

三 唐の太宗の瑞馬としての白馬朱鬣

——貞觀の治との關わり

老莊思想を核として神仙・方術等を取り込み成立した道教は、魏晉南北朝を通じて神格化された老子を祖とし、唐には國家によって手厚く保護されることとなる。このような道教の國教化と深く關わる老子遠祖傳説は、老子が唐室の受命を豫言したという點等から、未來豫言の識緯的要素が指摘されている（注17）。他方、初唐には史書や馬制關連の記述にも、瑞馬としての白馬朱鬣やそれと同義の『山海經』の吉良が少なからず記録される。よって本章では、白馬朱鬣が初唐の道教・圖讖および神

話書の神馬と如何に關わりながら、『高祖實錄』の老子遠祖傳説に於いて老子の乘馬として示されたのかを、とくに初唐の高祖・太宗期にみる政治的文脈から考えてみたい。

1 太宗の受命・治績を壽ぐ白馬朱鬣——道教・儒教

白馬朱鬣は、初唐に至ると、秦州・甘州・涼州など中國西北から獻納される祥瑞としても記録されるようになる。歴代の史書・類書を通覧すれば、北周の明帝期⁽²⁸⁾の一例を除き、唐の貞觀年間に甘州、開元二年に涼州など、白馬朱鬣はいずれも「西方」から獻上された瑞馬であり、その時期も唐の前半に集中することが分かる。とくに突出しているのは、太宗の時代である。西方から白馬朱鬣が獻上されるのみならず、貞觀十三年には「吉良厩」⁽²⁹⁾（後述）という名の皇帝の厩舎において「白馬朱駿」が生まれた、との記録がみえている。よって、貞觀年間のもの⁽³⁰⁾とされる白馬朱鬣の出現時期を太宗の具體的な治績に照らしながら、その含意を考えてみたい。

唐代の瑞馬・白馬朱鬣（駿）の出現記録は、①貞觀二年、②貞觀十三年、③開元二年に見える。まず①の甘州からの白馬朱鬣の上納のあった貞觀二年は、玄武門政變により秦王李世民が太宗となつた翌年、全國統一が完成した年である。さらに②の二年前（貞觀十一年）には貞觀律令の公布とともに、道教を儒教・佛教の上位とする道先佛後の詔が宣布され、②の翌年の貞觀十四年には、經書解釋の統一を圖つた『五經正義』編纂の敕命が降されている。つまり、皇帝の吉良厩に白馬朱鬣が生まれたとされる貞觀十三年とは、太宗の貞觀の治の中核たる道教・儒教政策の基盤固めの時期にあたるのである。

このことは、『山海經』の「吉良」が太宗期において「白馬朱鬣」と同一視されたことのみでなく、それが道教・儒教を中心とする太宗の治績を嘉する瑞馬として受容されたことを傍證するだろう。さらに、この様に太宗の時期に増える白馬朱鬣の記述をめぐり注目すべきは、太宗の皇位繼承と密な関わりをもつた道教・圖讖とそれと不可分の太宗側近の動向である。

2 秦王李世民の受命と白馬朱鬣——玄武門前後

唐の太宗の貞觀の治は善政の根本として知られる。しかし、後世に名君として知られる太宗の帝王の座は、實兄で李淵の嫡長子である太子建成、實弟の元吉を殺戮した「玄武門の變」を経て手にした血塗られたものであった。その太宗の貞觀の治を支えた側近の代表が、王府主席の房玄齡であり、彼こそが、唐室の遠祖老子の乗馬として白馬朱鬣を示した初めての記録『高祖實錄』の編者なのである（『舊唐書』卷四六・志第二六經籍上）。その動向に注目してみると、着位前の太宗とともに茅山派道士の王遠知に接觸を試みているように、道教との関わりが見逃せない。王遠知は高祖にも符命を傳えているが、重要なのは、玄武門の政變直前には、房玄齡とともに微服して訪れた秦王李世民に對し、その受命を豫言していることである。⁽³²⁾ こうした點から、武德九年、秦王李世民が房玄齡ら腹心と企てた玄武門の變は、王遠知を始めとする道士が李世民の皇位繼承を讖緯的な知識を持つて支えたことが注目され、後述する法琳など佛教徒の擁する李

建成との間に爲る道佛の主導權争いと見る説もある。⁽³⁴⁾

これを踏まえ、高祖の武徳年間から玄武門變までの唐室による道教政策の流れから房玄齡撰『高祖實錄』の老子遠祖傳説に初見の白馬朱鬣の意味を改めて考えてみたい。まず、武徳四年には道士傳奕による排佛獻策がなされ、その四年後の武徳八年には高祖が道・儒・佛の順とし、さらにその翌年には房玄齡らと組んだ太宗が玄武門の變を起こしている。こうした流れから、房玄齡の手になる『高祖實錄』の老子遠祖傳説が李世民による洛陽の無血開城の爲された武徳三年の出来事とされる點をみれば、そこに初出の「白馬朱鬣」は太宗自身の受命の瑞馬として示された可能性が考えられるのである。

さらにこのような視點から、太宗期に集中する瑞馬・白馬朱鬣の記録を振り返って見れば、次のような推測が成り立つのではないか。つまり、古き神話書の神仙馬吉良に由來する白馬朱鬣を、唐李氏の受命を豫言する白衣聖人＝老子の白馬朱鬣として讀み替え、それを老子遠祖傳説に加えたのは、讖緯に通じた道士とともに太宗の皇

位繼承を支え、その指揮下で正史編纂に携わった房玄齡等の側近であつた、ということである。また、太宗期に集中するこの瑞馬・白馬朱鬣の記述からみると、老子遠祖傳説の成立を促したのは、從來指摘されるような、鮮卑出身の唐李氏の受命の正當化・神祕化という目的に留まらない。兄弟殺しを経て帝位を得た太宗自身の受命をも保證するもの、と考えて大過ないだろう。

初唐王權と圖讖の關わりから、高祖李淵の太原舉兵時に、佛教界がその受命の瑞兆として白雀や紫雲を示した話が『創業注』に見える點に注目する論もあるが、⁽³⁵⁾しかし、李淵の一代記とされる『創業注』に見えるのは、⁽³⁶⁾彼を天下平定に導く白衣老人のみで「白馬朱鬣」への言及は一切ないのである。つまり、老子の乗馬たる白馬朱鬣が高祖李淵の稱讃を目的とする『創業注』には現れず、太宗の受命・皇位を支えた房玄齡撰『高祖實錄』に初見なのは、それが高祖ではなく太宗の受命と治績を保證する祥瑞として掲げられたものであるために他ならない。こうして太宗期に老子遠祖傳説に加えられた白馬朱鬣

は、神仙馬の要素によってのみ太宗の治績を神威化するのではない。舊稿(二〇一九、注21)で指摘したように、魏晉には「皇位」を象徴するものとなった皇帝馬「白馬朱鬣」は、漢代緯書・祥瑞文獻の「賢良な臣下を持つ周文王を壽ぐ瑞馬」のイメージを踏まえる。となればそれは、殷周革命の先鞭をつけた周文王同様、房玄齡などは、「賢良の臣下」の助力により遂行された皇位繼承を経て、貞觀の治を爲した太宗自身の受命を神威化するのに相應しい「皇帝の瑞馬」として、唐受命の老子遠祖傳説に取り込まれた、と見ることが出来るのではないか。

3 太宗の受命・唐室永續を壽ぐ千歲馬「吉良」

3-1、唐代皇帝の「吉良厩」と『山海經』の神話利用

他方、従来の馬政研究でもほとんど言及のない「皇帝の厩舎名」の選擇根據から考えてみると、初唐の老子遠祖傳説の「白馬朱鬣」は、太宗の道教優先政策とともに、『山海經』の西方の神仙馬吉良のイメージと密に係わるものであったと推測できる。⁽³⁷⁾

唐の馬政は地方での放牧(監牧)、中央皇帝の厩舎での飼育(繫飼Ⅱ厩牧)に大別される。本論で注目するのは後者、すなわち皇帝の厩舎である。唐の太宗の敕命になる『隋書』百官下はじめ史書の記述を見ると、天子の厩は尙乘(局)が掌ったこと、全部で十二の厩が左右「六閑」⁽³⁸⁾とされ、その六閑は初唐には次のように呼ばれたことが分かる。⁽³⁹⁾

一、飛黃(『山海經』郭璞注、『淮南子』冥覽訓、『瑞應圖』)

二、吉良(『山海經』郭璞注、郭璞『山海經』注引『逸周書』、『瑞應圖』)

三、龍媒(『漢書』禮樂志)

四、駒駉(『山海經』『逸周書』『瑞應圖』)

五、駉駉(『逸周書』『史記』『瑞應圖』)

六、天苑(『史記』天官書)

括弧内に示した典據を見れば、總じて神話古史中の馬——とくに『山海經』に見え六朝成立の『瑞應圖』には祥瑞として示される瑞馬が多いことが顯かである。この

うち、皇帝の厩舎名として重視されてきた飛黃（初唐以前は乘黃・注41『玉海』兵制）は依然第一とされるが、續けて新たに現れるのが吉良である。飛黃（乘黃）も『山海經』初見の「乗れば二千歳になる」という黃帝に繋がる長壽をもたらす神仙的異獣であることから、吉良が飛黃とともに最も重要な皇帝の厩舎名としたのは、王朝とその皇帝に千歳をもたらす『山海經』に伝えられる古來の神話的な神仙馬であることに加え、郭璞注によつて黃帝の子孫とされた吉良が、黃帝を頂く土徳唐室の受命にも叶うためと考えられる⁽⁴¹⁾。

3—2 武后期にみる白馬朱鬣の千歳馬「吉良」の降格
さらに言うならば、唐の太宗によるその老子遠祖化政策の重要な一例である『高祖實錄』記述のうち、李淵・李世民的天下平定を豫言する場面において、白馬朱鬣に乗る老子が「（唐天子の）子孫 且に千歳ならんとす。」と告げる件も（——原文訓讀(b)）、『山海經』の朱鬣の白馬・吉良の「乗れば千歳となる」要素に據る可能性が考

えられる。例えば初唐の四傑として名高い王勃は、土徳の唐王朝を五行のうち最長の「千年王朝」であると詠う⁽⁴²⁾。他方、その王勃の友人薛曜も『山海經』の神話由來の馬を多用する「舞馬篇」の末尾を「皇帝を壽ぐ千歳馬・吉良」で結ぶこと等から、唐王朝草創期に於ける『山海經』の千歳馬吉良とは、「唐王朝千年の永續」を祈念する皇帝馬でもあったことが顯かである。

太宗の道教優先政策を覆し佛教を優先したのが武則天である。その時代に改變された皇帝厩「六閑」の厩舎名は、一、飛龍、二、祥麟、三、鳳苑、四、鵷鷺、五、吉良、六、六群であった⁽⁴³⁾。こうした皇帝厩舎の格付けをめぐり見逃せないのは、武后期には瑞馬・白馬朱鬣の報告例がないこと、皇帝の厩舎名として太宗期には二位であつた吉良が、五位に降格されていることである。さらにこの武后期にみる吉良の降格を、老子との血縁を強調した太宗の道先佛後の詔の後、吉良厩に白馬朱駿（鬣）が生まれたとする貞觀十三年の記事と併せてみると、皇帝馬「乗者に千歳をもたらす吉良＝白馬朱鬣」とは、太

宗による道教優先政策、およびそれと連動する一連の老子遠祖化政策により唐室の受命を保障した神仙道教的な瑞馬であったことが改めて確認されるだろう。

しかし、例えば同じ『山海經』西方の白獸であり六朝の『瑞應圖』では瑞獸となった白狼や白虎等の動物ではなく、白馬朱鬣の吉良という「馬」が老子の乗り物として選ばれ、初唐の太宗を嘉する「瑞馬」とされたのはなぜか。土徳の黃帝に繋がる神仙馬の要素のほか、もう一つの理由を「隴西」という地、及びそこに産出する「馬」に求めてみたい。

四 中華の皇帝馬「白馬朱鬣」の誕生 ——初唐に於ける隴西の重要性

1 隴西李氏と老子遠祖傳説——『法琳別傳』の禁書背景
太宗の貞觀十三年、中華西北の「隴西」という地が、老子遠祖傳説と浅からぬ關係にあったことを明示する事件が起きている。痛烈な道教批判で知られる法琳の『辯正論』に端を發する一連の議論である。法琳の護法活動

についての委細は礪波護の論考に譲り（注34）、ここで注目したいのは、道士秦世英による「法琳が老子を非難した真意は唐室の祖先を誹謗する點にある」との讒言に對する、法琳による「唐室李氏の出自」をめぐる批判である。『法琳別傳』に據れば、「唐室『隴西李氏』を主張する太宗に對し、法琳は「唐李氏は老子に繋がる隴西李氏ではなく拓跋李氏であり、老子とは無關係」と喝破した⁽⁴⁵⁾のである。

唐室の出自については謎も多いが、唐代編纂の『晉書』でも漢人王朝西涼の李暠を遠祖とするように、唐室にはその出自を權威化・神祕化せんとする姿勢があることに着目したい。とくに見逃せないのは、法琳により唐室の隴西李氏否定説の示された貞觀十三年という年が、ちょうど皇帝の吉良厩に白馬朱鬣が生まれた年であり、その二年前には「道先佛後」令が發布、その翌年は唐李氏の血統を主張する太宗の敕命による『貞觀氏族志』改訂版の完成年、という具合に、唐室・太宗の受命正當化のための政策が次々と成立した時期にあたることである。

さらに、『法琳別傳』が太宗期に禁書とされた理由について、「唐室と老子の關係を否定した法琳の答辯を載せるため」とする礪波護の指摘を併せてみれば、唐李氏が「隴西」という地を通じて老子と繋がることの認識の政治的徹底化が圖られたのはやはり太宗期であり、該期の道教優先政策の下、老子遠祖傳説に白馬朱鬣が加えられた事象とも一連のものと捉えねばならない。

このような唐室とその祖老子を繋ぐ地「隴西」の重要性を踏まえ、最後に、隴西という地が、さらに太宗期の「馬政」を通じ、「唐室と白馬朱鬣」を繋ぐ要諦としても認識された可能性を確認したい。

2 中華軍事力の象徴「關隴の白馬朱鬣」

——太宗から玄宗へ

唐の始めには僅か五千匹とされた馬は、太宗の貞觀から高宗の麟德までの四十年間に、七十萬を越える數にまで増加した⁽⁴⁸⁾。唐代馬政の研究では、唐の軍事力の基盤であった府兵制は、地方の官營牧地・監牧における軍馬の

育成によって支えられたこと、唐初の監牧は建國時に得た突厥馬と隋馬を、隴西を含む隴右の地（關隴）に移したことに始まったこと、さらにはその中華西北の牧地こそが、太宗期の馬政の成功を支えたこと、などが指摘されている⁽⁴⁹⁾。

太宗期の軍事力を支えたこの隴西という地と、老子遠祖傳説にみる「白馬朱鬣の吉良」との接點についてとくに本論で注目したいのは、「隴西」という中華西北の地が『山海經』の朱鬣の白馬「吉良」の産地でもあったことである。例えば、郭璞『山海經』注でも西方犬戎の吉良（吉黃）と同一視するものとして引く『周書』の犬戎の吉黃の乗は「隴以西有大戎」と解されるように、太宗期に結實した唐王朝の軍事力を支えた馬同様、隴西という地に産まれる馬なのである。

唐の全國統一が爲された後の貞觀四年、太宗は東突厥を支配下におき天可汗と尊稱され、續けて吐蕃・鐵勒など西域異族を下し、漢以來空前の版圖を廣げた。いわばその立役者となったのが、關隴産の軍馬であった。この

關隴の軍馬・白馬朱鬣について想起すべきは、太宗が全國統一を果たした年、隴西から瑞馬・白馬朱鬣が献上されたとの祥瑞記述だろう。つまり、このように白馬朱鬣は吉良が太宗による中華の版圖擴張を壽ぐ瑞馬となり得たのは、隴西の騎馬軍團の存在が不可欠なのである。唐室と老子を繋ぐ隴西の白馬朱鬣に對し、唐の領土擴張を果たした「強大な關隴騎馬軍團」のイメージが重ねられた可能性は、例えば、同じ鮮卑系關隴集團の祖である北周明帝の武成元年に「關隴（秦州）から白馬朱鬣が献上された」とする記事が、唐室受命の正當化とその權威化政策の一環として貞觀十年に完成した太宗の敕命による史書の一、『周書』に初見である點によっても改めて傍證されるだろう。⁽³³⁾

唐代には太宗ののち、關隴（涼州）からの朱鬣の白馬の献上がもう一例ある。玄宗の開元二年である。元來、軍馬の自給には不利な中國において馬政が成功したのは、太宗の貞觀の治と玄宗の開元の治のみであり、いずれも關隴の牧草地に育まれた軍馬の存在に據るとされる。玄

宗が法籙を授かり、自ら『老子經』注を作成した道教皇帝であったことを鑑みれば、太宗の貞觀の治と玄宗の開元の治には、老子を尊崇する道教優先政策とともに、關隴を據とする馬政の成功といった白馬朱鬣をめぐる共通項が指摘できる。

このようにしてみると、太宗の貞觀の治に倣った玄宗の開元の始めに隴西から白馬朱鬣が献上されたこと、玄宗敕撰の『大唐六典』に「白馬赤髦・白馬朱鬣」といったあかい鬣の白馬が最高ランクの祥瑞として記録されるのみならず、同時期成立の祥瑞類書『唐開元占經』に「白馬朱鬣」が獨立項目となるのは（注20）、恐らく偶然ではない。玄宗にとつての白馬朱鬣とは、國教としての道教・儒教の基礎を固め、中華の對外的軍事政策にも大きな成功を収めた太宗の貞觀の治の再來をイメージさせる皇帝の瑞馬でもあったのではないか。

結語

唐の太宗は圖讖・祥瑞を禁じたとされるが、しかし、⁽³⁵⁾

隋末、圖讖符瑞により天命を立證し帝位を得た李淵の手法に倣い、李世民もまた自らの天命と帝位を保證するものとして古き神話書に起源する白馬朱鬣を政治利用したのである。つまり、老子遠祖傳説は高祖一代になるものではなく、太宗の時代にその非常手段的な皇位移譲を正當化・神祕化するものとして道教的・讖緯的な皇帝馬「白馬朱鬣の吉良」が挿入され、のちの道教文獻に繼承される原型が成立したものと判斷できる⁽⁵⁷⁾。

しかし、現在傳わる老子圖のほとんどが青牛に乗る作例であり、文獻の傳える重要性に反し、白馬朱鬣に乗った老子の圖像例は見當たらぬ。その要因の一つは、王朝創業期に多く用いられる祥瑞・讖緯の類は安定の時代には忌避の對象となる點に求めることができる⁽⁵⁸⁾。

ふるく漢代緯書に收められ、太宗期には老子遠祖傳説に老子の乗馬として加えられたれた白馬朱鬣も、それが初唐王權の受命に關わるものと認識されていただけに、その例に漏れなかったのではないか。中唐以降の道教文獻では、漢代緯書に初見の「色＋馬＋色＋鬣」という獨自

の四字句で表される白馬朱鬣の緯書描法が崩れゆくことも(注57、(c) (e))、これと不可分の現象と考えられる。こうして老子の乗る「あかい鬣の白馬」は初唐政權の政治的都合により革命にまつわる讖緯的要素を次第に弱め、唐王朝創建後、その主なイメージは「教祖・聖人の乗馬」に遷り始めた。中唐の佛教文獻に、佛陀の愛馬健陟としての白馬朱鬣【圖2】が現れ始めることもそれを物語るものだろう⁽⁵⁹⁾。

(1) 唐室の祖を名乗る老子が李淵親子の天下平定を助け受命を豫言する傳説を總稱して老子遠祖傳説と呼ぶ。

(2) 宮川尚志「唐室の創業と茅山派遣道教」『佛教史學』三、一九五〇年(同氏『六朝史研究』宗教篇)平樂寺書店一九六四年、第七章・第五節所收)、横手裕『道教の歴史』山川出版社二〇一五年など参照。

(3) 『唐六典』卷第四「尚書禮部」中華書局二〇二二年、一一四頁。

(4) 愛宕元「唐代樓觀考——歐陽脩撰「大唐宗聖觀記」碑を手がかりとして」『中國古道教史研究』同朋舍出版一九九二年所收。

- (5) 「甲子、有白衣野老、自云霍太山遺來、詣帝請謁。帝弘達至理、不語神怪、逮乎佛道、亦以致疑、未之深信。門人不敢以聞。此老乃伺帝行營、路左拜見。帝戲謂之曰、「神本不測、卿何得見？卿非神類、豈共神言」。野老對曰、「某事山洞、山中聞語」、「遣語大唐皇帝云、若往霍邑、宜東南傍山取路、八月初雨止、我當爲帝破之、可爲吾立祠廟也。」」『大唐創業起居注』（以下『創業注』）『大唐創業起居注箋疏』中華書局二〇二二年、七六頁。
- (6) 『正統道藏』（以下『道藏』）第一八冊、藝文印書館一九七七年、一四二〇二―三頁。
- (7) 『道藏』第三三冊『龍角山記』所收「唐明皇御製唐觀紀聖銘」『肇我高祖之提劍起晉、太宗之仗鉞入秦、鵬搏風雲、麟闢日月。夏臣醜而已去、殷鼎輕而未徙。老君灑洗然華浩、白鬣朱鬣、見此龍角之山、示我龍興之兆、語絳州大通堡人吉善行曰、「吾而唐帝之祖也、告吾子孫、長有天下。」於是一開赤伏而萬姓宅心、一麾白鬣而六合大定。……高祖征其二異、拜善行朝散大夫、命舍人柳憲往祠焉。』、二六二―三六頁。
- (8) 注4愛宕論文一九九二年等。
- (9) 金文明校證『金石錄校證』「右『唐龍角山紀聖銘』、明皇撰。按『高祖實錄』…「武德三年四月辛巳、晉州人吉善行、於羊角山見白衣老父乘白馬朱鬣、謂善行曰…「爲吾語唐天子、吾爲老君、汝祖也。今年平賊後、汝當爲帝、天下太平、必得百年享國、子孫且千歲。」」太宗遣使者杜昂致祭。須臾、神復見、謂昂曰…「歸語天子、我不食、何煩祭爲？」高祖異之、立廟於其地、授善行朝散大夫。」上海書畫出版社一九八五年、四七六頁。
- (10) 『創業注』卷一、大業十三年六月己卯條「①（突厥）康鞘利將至、軍司以兵起甲子之日、又符讖尙白、請建武王所執白旗、以示突厥、帝曰、誅紂之旗、牧野臨時所仗、未入西郊、無容預執、宜兼以絳雜半續之、諸軍稍旛皆放此、營壁城壘、幡旗四合、赤白相映若花園。」②開皇初、太原童謠云…法律存、道德在、白旗天子出東海、亦云白衣天子。故隋主恆服白衣、每向江都、擬於東海。…」
- (11) ①は例えば、李淵が赤徳の隋と一定の距離を保つため白を混入したとみる南宋の胡三省以來的の説（『資治通鑑』卷一八四の義寧元年六月己卯條「雜用絳白」記事に對する胡三省注）、②は例えばゾロアスター・マニ教との關わり（柳存仁「唐以前拜火教摩尼教在中國之遺痕」『和風堂文集』上海古籍出版社一九九一年、五二―五五頁）、ほか佛教・道教との關わりは本文參照。
- (12) 唐長孺「白衣天子試論」『燕京學報』三五、一九四八年。
- (13) 『創業注』卷一、大業十三年六月癸巳には續けて「其平旦、有僧俗姓李氏、獲白雀獻之。至日未時、又有白雀來止帝牙前樹上、左右復捕獲焉。明旦、有紫雲見于天、

當帝所坐處、移時不去、旣而欲散變爲五色、皆若龍獸之象、如此三朝、百姓咸見、文武謁賀……帝皆抑而不受。」と白瑞が多く示される。

- (14) 宮川尙志(一九五〇、注2)は、老子を唐室の祖として道教を國教に導いたのは茅山派道士の王遠知と説く。氣賀澤保規『大唐創業起居注』の性格について『鷹陵史學』八、一九八二年。

- (15) 陳寅恪『唐代政治史述論稿』重慶商務印書館一九四三年初出。

- (16) 姜望來『謠讖與北朝政治研究』第九章「論「白衣天子出東海」」天津古籍出版社二〇一一年、一九四—二一〇頁。

- (17) 李豐楙『唐人創業小説與道教圖讖傳說』同氏『六朝隋唐仙道類小説研究』第六章、學生書局一九八六年、李剛『唐高祖創業與道教圖讖』『宗教學研究』一九八八年第三期、吉川忠夫「王遠知傳」『東方學報』六二、一九九〇年等。

- (18) 杜光庭『歷代崇道記』の老子遠祖傳說(注6)を據に霍太・羊角山の老子傳説は王遠知の作爲とする宮川説(一九五〇)に對し、吉川忠夫(一九九〇、注17)は『高祖實錄』佚文など早期の老子遠祖傳説に着目し、それらに王遠知への言及がない等から、王遠知と唐室の接點は高祖ではなく太宗(王世充討伐後)に始まると主張

する。

- (19) 佐原康夫「漢代祠堂畫像考」『東方學報』京都六三、一九九九年、四〇頁參照。

- (20) 唐瞿曇悉達『唐開元占經』卷二一八「白馬朱鬣」引『禮記威儀』「周王、白馬朱鬣」、「春秋公羊傳」隱公元年「王者孰謂、謂文王也」漢何休解詁「文王、周始受命之王」唐徐疏「即『我應瑞』云「季秋之月甲子、赤雀銜丹書入豐、止于昌戶。昌再拜稽首授之。」又『禮說』云、文王得白馬朱鬣、大貝玄龜是也。」唐劉賡『稽瑞』(早稻田大學圖書館清刊本)引『禮斗威儀』「真人何黃、馬鬣何朱」等。

- (21) 拙稿「文王の瑞馬「白馬朱鬣」の誕生と展開——姜里說話を端緒に」『中國詩文論叢』三八、二〇一九年、「祥瑞としての馬(白馬朱鬣・澤馬)——天と地をつなぐもの」會津八一記念博物館『古代中國の神話と祥瑞』圖錄二〇二二年等參照。

- (22) 『禮記』月令の秋の皇帝儀禮にみる「皇帝の戎路」牽く「白輅(鄭玄注…白馬黑鬣)」は晉司馬彪『後漢書』志第五「禮儀」中の同じ皇帝儀禮では「立秋之日、白郊禮畢、始揚威武、斬牲于郊東門、以薦陵廟。其儀乘輿、御戎路、白馬朱鬣」と、白馬朱鬣に變わる。注21拙稿參照。

- (23) 魏晉の國家稱讃文には、皇位の象徴として山車・器

車・澤馬など、『禮緯』由來の車馬の瑞が多く詠まれ始める。拙稿「祥瑞としての山車―亂世を統べるかたち」

『中國詩文論叢』三五、二〇一六年參照。

(24)

『山海經』海内北經「犬封國曰犬戎國。狀如犬。(a)黃帝之後、卞明生白犬二頭。自相牝牡、遂爲此國。言狗國也)……有文馬縞身(b)(色白如縞)朱鬣、目若黃金。名曰吉量(一作良)乘之壽千歲(c)(周書曰、犬戎文馬、赤鬣白身、目若黃金。名曰吉黃之乘。成王時獻之。(d)六韜曰、文身朱鬣、眼若黃金、項若雞尾。名曰雞斯之乘。大傳曰、駁身朱鬣、雞目。(e)山海經亦有吉黃之乘、壽千歲者。惟名有不同、說有小錯、其實一物耳。今博學之、以廣異聞耳也)」、訓讀は前野直彬譯注『山海經・列仙傳』集英社一九七五年、四六八―九頁による。

(25)

郭璞が『山海經』西方の白い神仙の博物に注目する背景に、「金(白)徳の東晉の正統性」を主張する意圖がある事は、拙稿「郭璞對『山海經』神馬吉良の解釋―以晉王朝受命的瑞石傳説爲綫索」中國社會科學院『中國本土宗教研究』二〇二二年第二期(總第六輯)。

(26)

『漢魏六朝百三家集』卷五七・晉郭璞『山海經圖讀』「吉良」「金精朱鬣、龍行駿時、拾節鴻驚、塵不及起、是謂吉良、釋聖牖里」上海古籍出版社一九九八年。

(27)

『山海經』の西次三經には西王母の玉山に隣接する崑山に黃帝昇仙の「白玉膏」、西王母の玉山に接する黃帝

の住處「軒轅丘」、海外西經や大荒西經には八百年生きる「長壽の軒轅國」の記述があり、黃帝の末裔「犬戎國」を包含する『山海經』西北の條には西王母・黃帝を巡る神仙的傳説が多い。

(28)

『周書』卷四・明帝「武成元年、……四月戊午……、秦州獻白馬朱鬣。」中華書局校點本(以下正史は同様)五六頁、『冊府元龜』帝王部・符瑞三「貞觀二年九月、甘州獻白馬朱鬣」中華書局二五四頁、同「開元元年十二月……涼州獻、朱駿尾白馬。」二五七頁。

(29)

『玉海』卷一百四十九・兵制馬政下・唐乘黃令「貞觀十三年三月、吉良廐、產白馬朱駿。」臺北大化書局一九七七年、二八二頁。

(30)

『唐大詔令集』卷一一三「道士女冠在僧尼之上詔」「況朕之本系、起自柱下……。自今已後、齋供行法、至於稱謂、道士女冠可在僧尼之前、庶敦本之俗、暢於九有、尊祖之風、貽諸萬葉。」商務院書館、五八六―七頁。

(31)

唐劉廣『稽瑞』「真人何黃、馬鬣何朱」の引用書に「禮斗威儀」曰、周文王時、白馬朱鬣。『山海經』曰、白馬朱鬣出大封之國、乘之三千歲、文馬縞衣身朱鬣者也。」とあるように、唐代の祥瑞類書にも犬戎國の吉良白馬朱鬣との共通認識が確認できる。

(32)

『舊唐書』卷一九二隱逸傳・王遠知「高祖之龍潛也、遠知嘗密傳符命。武德中、太宗平王世充、與房玄齡微服

以謁之、遠知迎謂曰「此中有聖人、得非秦王乎。」太宗以實告、遠知曰「方作太平天子、愿自惜也。」、一五二五頁。

- (33) 王遠知の他、薛頤・傅奕といった道士も圖讖的知識をもつて李世民の受命を豫言している。『舊唐書』卷七九「傅奕傳」中華書局二七一四頁、同書卷一九一「薛頤傳」五〇八九頁。

- (34) 礪波護「法琳の事蹟にみる唐初の佛教・道教と國家」『中國古道教史研究』一九九二年、二二五九頁。(同氏「文物に現れた北朝隋唐の佛教」法藏館二〇二二年等に再録)

- (35) 『創業注』原文は注13。諸戸立雄「唐王朝の創業と圖讖」『中國佛教制度史の研究』一九九〇年、第一章・第六節、一六六―七四頁參照。

- (36) 福井重雅「大唐創業起居注考」『史觀』六三・四、一九六一年では、『創業注』は禁中での出來事を事實として日記する一般の起居注とは體裁が違い、高祖の治績の讚美を目的とした一代記であるとし、その成立も玄武門の政變の前とする。

- (37) 唐代馬政については馬俊民他『唐代馬政』西北大學出版社一九九五、宋常廉『唐代的馬政』(上下)『大陸雜誌』二九・一一二、一九六四年等參照。

- (38) 『漢書』卷十九百官公卿表上「龍馬閑駒」師古注「閑、

闌、養馬之所也」七二九頁。

- (39) 『隋書』卷二百官下「尙乘局置左右六閑。一左右飛黃閑、二左右吉良閑」七九五頁、『新唐書』卷五十兵志「又以尙乘掌天子之御左右六閑、一曰飛黃、二曰吉良」一三三七頁。

- (40) 注24前野『山海經』譯注、海外西經・白民國・乘黃、四一〇―一頁。

- (41) 初唐最重要の皇帝厩「飛黃(乘黃)・吉良」の由來を巡り「玉海」卷一百四十九兵制馬政下・唐乘黃令では、『齋職儀』『山海經』等を引き共に土德の黃帝との繋がりを示す。しかし、その直接の典據は『山海經』西方異獸の「乘黃・吉量」を「飛黃・吉良」の名に改め、兩者を土德の黃帝の子孫に讀みかえた郭璞注とすべきだろう(本文第二章末尾參照)。

- (42) 『舊唐書』卷一九八王勃傳「勃聰警絕衆、於推步歷算尤精、嘗作『大唐千歲歷』、言唐德靈長千年、不合承周、隋短祚。其論大旨云「以土王者、五十代而一千年・金王者、四十九代而九百年……」。此天地之常期、符曆之數也。自黃帝至漢、竝是五運眞主。五行已過、土運復歸唐德承之、宜矣。……」大率如此。」五〇〇六頁。

- (43) 『文苑英華』卷三四四獸・馬十首、唐薛曜「舞馬篇」『星精龍種競騰驤、雙眼黃金紫豔光。一朝逢遇昇平代、①伏皇銜圖事帝王。我皇盛德苞六羽、俗泰時和虞石拊。

②昔聞九代有餘名、今日百獸先來舞。……充雲翹兮天子庭、荷日用兮情無極。③吉良乘兮一千歲、神是得兮天地期……華文書局一九六五年、二一五四頁。冒頭には①『山海經』海外西經の乘黃②同上・夏后啓の九代馬(『山海經校注』四〇一頁)、末尾③にも『山海經』海内北經「吉良」等、『山海經』の西方馬が郭璞注を通じて皇帝馬として詠まれる。

(44) 『新唐書』卷四七百官二「武后萬歲通天元年、置仗內六閑、一曰飛龍、二曰祥麟……」一二一七頁。

(45) 『山海經』西山經・孟山「其獸多白狼白虎」、郭璞注「外傳」曰、周穆王伐犬戎、得四白狼白虎。虎名赧赧、「藝文類聚」卷九十九祥瑞下・騶虞引『瑞應圖』「白虎者、仁而不害、王者不暴虐、恩及行葦則見」、同上白狼引『瑞應圖』「白狼王者仁德名哲則見、一本曰、王者進退動准法度則見。周宣王時白狼見犬戎滅」。

(46) 『大正新修大藏經』卷五十、唐彥琮「唐護法沙門法琳別傳」卷三、0210a「帝(太宗)因親降問曰。朕本系老聃。東周隱德。末葉承嗣。起自隴西……。法琳對答說「琳聞。拓拔達闐唐言李氏。陛下之李。斯即其苗。非柱下(老子)隴西之流也。」、括弧内松浦加筆。

(47) 注34礪波護二〇二二年、一四二―四頁。
(48) 唐張說「大唐開元十三年隴右監牧領德之碑」『唐文粹』卷二二、世界書局一九七二年、四頁。

(49) 橫山貞裕「唐代の馬政」『國士館大學人文學會紀要』三、一九七一年參照。

(50) 『舊唐書』卷五十・兵志、一三三七頁。

(51) 齋藤勝「唐代の馬政と牧地」『日中文化研究』十四、一九九九年等參照。

(52) 朱右曾『逸周書集訓校釋』王應麟注の『史記』匈奴傳、世界書局一九六二年、一九五頁。

(53) 『周書』「高祖實錄」など白馬朱鬣を關隴集團の皇帝の瑞馬に仕立てるのが太宗期の作爲ならば、太宗敕撰『隋書』に初見の「皇帝の吉良厩」の出現を太宗期に求めることも可能である。

(54) 注51齋藤論文參照。

(55) 『全唐文新編』卷四太宗皇帝「禁奏祥瑞詔」吉林文史出版社二〇〇〇年、四五頁。

(56) 注35諸戸論文參照。

(57) 『高祖實錄』以降、朱鬣の白馬に乗る唐室の遠祖老子の記述は、主に道教文獻に繼承されてゆく。(以下、時系列に並べる)

(a) 唐房玄齡撰『高祖實錄』佚文(武德三年)見白衣老父、乘白馬朱鬣。

(b) 唐玄宗御製「慶唐觀紀聖銘」『龍角山記』第一(武德)老君迺洗然華浩、白驥朱鬣。

(c) 唐五代杜光庭撰『歷代崇道記』第四『道藏』第一八冊、

一四二〇二頁（武德元年）著素衣載金冠、乘朱驤白馬。

(d) 宋賈善翔編『猶龍傳』卷五『道藏』第三十冊、二三九四八頁、（龍朔二年）有一人……鬚髮皓白、上下素衣烏冠、白馬驤尾及蹄皆赤。

(e) 宋謝守撰『混元聖記』卷八『道藏』第三十冊、二三八一八頁、（武德元年）老人鬚髮皓白、素衣烏冠執紅拂、乘白馬鬚尾及蹄皆赤。

(58) 祥瑞・圖識の類は王朝草創期に機能し、社會秩序が確立すると排斥されたことは注35諸戸論文ほか、尾形勇「中國古代における帝位の繼承——その正統化の過程と論理」『史學雜誌』八五、三、一九七六年參照。

(59) 下野玲子「中國佛教美術における「白馬朱鬣」」『佛教藝術』四、二〇二〇年によれば、漢譯佛典には白馬としか書かれていなかった佛陀の乘馬が、隋末から唐にかけての佛教圖像では白馬朱鬣に描かれるようになるという（但しこの段階の佛教文獻には未出）。その理由として、氏は松浦報告書（『高梨學術獎勵基金年報』二〇一二年所收）を踏まえ、中國在來の祥瑞・白馬朱鬣からの影響を指摘する。氏はまた、中唐には悉達多太子の乘馬「健陟」が朱鬣の白馬として説明されはじめ、十世紀前半迄には太子の乘馬があかい鬣の白馬であるとの認識が民間に定着していたと説くが、そうした「教祖聖人の瑞馬」のイメージの淵源は初唐成立の「老子の乗る瑞馬・

白馬朱鬣」に求められる。

〔附記〕 本稿は科學研究費基盤研究B（課題番號22H00620）「古代東アジアの祥瑞と王權——漢・唐代成立の瑞獸畫像をめぐる學際的研究」による研究成果の一部である。



【圖1】武氏祠の後漢祥瑞畫像石にみる白馬朱鬣・傍題「白馬朱鬣王者任賢良則至」（括弧缺字は『宋書』符瑞志に據る）。關野貞『支那山東省における漢代墳墓の表飾』東京帝國大學一九一六年。



【圖2】四門出遊（東門部分）唐時代（8紀～9世紀初）敦煌藏經洞將來・大英博物館スタイン・コレクションSp.88（『西域美術：大英博物館スタイン・コレクション』1、講談社、一九八二年、圖35-3）

从与初唐王权关系论老子远祖传说中的白马朱鬣

松浦 史子

建立唐朝的李氏自称为老子后裔之《老子远祖传说》是众所周知的。有关此传说的先行研究，主要以继承鲜卑血统的李唐王朝对本有的门阀贵族与外来的佛教势力主张其受命的正统性，神秘性的政治，对宗教的态度为研究中心，但对为何李唐王朝的远祖老子坐骑不是西汉刘向《列仙传》所载以来闻名的青牛，而是带有朱鬣的白马「白马朱鬣」此谜题尚无涉及。故本论欲从老子坐骑为白马朱鬣此文脉中，探讨可见的政治、文化意图和初唐王权之关系。

特别是聚焦在前行研究尚未探讨的《山海经》神话马吉良，指出在唐代，其与周文王瑞马白马朱鬣同等看待的《山海经》神马吉良，特别是在初唐王权被作为象征太宗的道教儒教政策与李唐王室永恒存在等之瑞马，并与推进初唐王权建立之关陇骑马军团的陇西马意象有所连结。且以此推测，唐朝建立时，作为秦王李世民以非常手段使皇位转移正当化/神秘化的被政治利用的白马朱鬣，其后反而避开其受命瑞马性质，主要以道教文献中教祖/圣人之坐骑被继承，并在中唐以后给予佛陀爱马蹏蹏意象很大影响。